

(第3種郵便物認可)

85.7.24(夕)

ひたひた

「海燕」誌上ではじまった

た埴谷・吉本論争は先日の本欄にもあつたように、

「朝日ジャーナル」七月十

九日号の登場

で、広い場所

に出されると

同時に理解の

風化にさらさ

れているよう

だが、論争の

現場はこんど

吉本隆明の「試行」64号が

出るにおよんで、さらに激

しくなってきた。

大岡昇平「成城だより」

(文学界・三月、六月)とう。しかも「世代層」ことの

見田宗介の「論壇時評」 共通の関心など設定が不可

(朝日新聞・四月二十六日 能だという事態)が重要だ

夕刊)をめぐって、吉本は という。

あい変わらず激しい口調で それにしても、こうまで

心戦している。 話が通じにくい論争とはい

論争のゆくえ

この論争の争点は、いま かなるものか、という嘆き

の五十歳代、六十歳代以上 は必ずしも記者だけの責任

の世代の思想に關しては ではない。吉本は小田実や

「決定的な意味をもってい 小中陽太郎に対しては、ス

るはず」で、四十歳代以下 ターリン主義という「二十

には無意味とみなされるこ 世紀の最も巨大な犯罪のひ

とは承知の上だと吉本はい とつに手を貸した」とこの

しる。

それなら吉本はこれらの

問題を総合する視点から、

下の世代にも通じるような

明晰さで、具体的な意見を

インタビュのかたちでも

いいから公表したらどうで

あろう。大岡昇平・埴谷雄

高との対立だけでもなにか

陰惨なフナイ気がみえはじ

めてきた。文壇や思想界に

論争がおこりにくく、おこ

れば半分が私闘になるのが

戦後四十年の帰結であつて

はわびしいのである。

(異邦人)